日蓮大聖人御書全集

曽谷殿御返事（そやどのごへんじ）

（成仏用心抄）（じょうぶつようじんしょう）

新版1433～1435

曽谷殿御返事（成仏用心抄）

建治2年('76) 8月3日　55歳　曽谷殿

夫れ、法華経第一の方便品に云わく「諸仏の智慧は甚深無量なり」云々。釈に云わく「境淵無辺なるが故に甚深と云い、智水測り難きが故に無量と云う」。

そもそも、この経釈の心は、仏になる道はあに境智の二法にあらずや。されば、境というは万法の体を云い、智というは自体顕照の姿を云うなり。しかるに、境の淵ほとりなくふかき時は、智慧の水ながるることつつがなし。この

境智合しぬれば、即身成仏するなり。法華以前の経は境智各別にして、しかも権教方便なるが故に成仏せず。今、法華経にして境智一如なるあいだ、開示悟入の四仏知見をさとりて成仏するなり。この内証に声聞・辟支仏さらに及ばざるところを、次下に「一切の声聞・辟支仏の知ること能わざるところなり」と説かるるなり。

この境智の二法は何物ぞ。ただ南無妙法蓮華経の五字なり。この五字を、地涌の大士を召し出だして結要付嘱せしめ給う。これを本化付嘱の法門とは云うなり。しかるに、

上行菩薩等、末法の始めの五百年に出生して、この境智の二法たる五字を弘めさせ給うべしと見えたり。経文赫々たり、明々たり。誰かこれを論ぜん。

日蓮はその人にもあらず、また御使いにもあらざれども、まず序分にあらあら弘め候なり。既に上行菩薩、釈迦如来より妙法の智水を受けて、末代悪世の枯槁の衆生に流れかよわし給う。これ智慧の義なり。釈尊より上行菩薩へ譲り与え給う。しかるに、日蓮、また日本国にしてこの法門を弘む。

また、これには総別の二義あり。総別の二義少しも相そむけば、成仏思いもよらず。輪廻生死のもといたらん。例せば、大通仏の第十六の釈迦如来に下種せし今日の声聞は、全く弥陀・薬師に遇って成仏せず。譬えば、大海の水を家内へくみ来らんには、家内の者、皆縁をふるべきなり。しかれども、汲み来るところの大海の一滴を閣いて、また他方の大海の水を求めんことは、大僻案なり、大愚癡なり。法華経の大海の智慧の水を受けたる根源の師を忘れて、余へ心をうつさば、必ず輪廻生死のわざわいなるべし。

ただし、師なりとも、誤りある者をば捨つべし。また、捨てざる義も有るべし。世間・仏法の道理によるべきなり。末世の僧等は、仏法の道理をばしらずして、我慢に著して、師をいやしみ、檀那をへつらうなり。ただ正直にして少欲知足たらん僧こそ真実の僧なるべけれ。文句の一に云わく「既にいまだ真を発せざれば、第一義天に慙じ、諸の聖人に愧ず。即ちこれ有羞の僧なり。観慧もし発せば、即ち真実の僧なり」云々。

南岳大師云わく「諸の悪人とともに地獄に堕ちん」云々。

謗法を責めずして成仏を願わば、火の中に水を求め、水の中に火を尋ぬるがごとくなるべし。はかなし、はかなし。いかに法華経を信じ給うとも、謗法あらば必ず地獄におつべし。うるし千ばいに蟹の足一つ入れたらんがごとし。「毒気は深く入って、本心を失えるが故に」はこれなり。

経に云わく「いたるところの諸仏の土に、常に師とともに生ず」。また云わく「もし法師に親近せば、速やかに菩薩の道を得、この師に随順して学せば、恒沙の仏を見たてまつることを得ん」。釈に云わく「本この仏に従って初め

て道心を発し、またこの仏に従って不退地に住す」。また云わく「初めこの仏菩薩に従って結縁し、またこの仏菩薩において成就す」云々。

返す返すも本従たがえずして成仏せしめ給うべし。釈尊は一切衆生の本従の師にて、しかも主・親の徳を備え給う。

この法門を日蓮申す故に、忠言耳に逆らう道理なるが故に、流罪せられ、命にも及びしなり。しかれども、いまだこりず候。法華経は種のごとく、仏はうえてのごとく、衆生

は田のごとくなり。

もしこれらの義をたがえさせ給わば、日蓮も後生は助け

申すまじく候。恐々謹言。

建治二年丙子八月三日　　日蓮　花押

曽谷殿